稲作・畑作　営農情報

次年度の技術対策

ばか苗病対策

①　適切な種子消毒・浸種・催芽～消毒効果を維持するために～

○種子消毒、浸種は必ず屋内で行い、開始時にお湯で水温が15℃になるように調整する。また、水温10～15℃を確保できるように消毒、浸種の開始は早くとも４月上旬からとする。

○複数の品種、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種、催芽しない

○浸種の水量は種子１kg当たり3.5ℓ（50kg当たり175ℓ）とする。

○浸種期間は水温10℃で６日間程度とし、水交換は２～３回とする。薬剤吹付・塗沫種子では浸種開始後２日間は水を交換しない。

○催芽温度は30～32℃とする。

②　環境衛生の徹底～周辺環境からの伝染を防ぐために～

○ばか苗病の発生したほ場の稲ワラや籾殻、粉塵等は伝染源となるため、種子予措を行う作業場所やその周辺を十分清掃する。

○消毒前の種子と消毒後の種子は同じパレットやシート等に置かない。

○浸種時と催芽時は容器に蓋をする。

○浸種、催芽で使用する機器や容器は使用前及び品種や消毒方法が変わる時に十分清掃する。

田植え時の留意点

①　植付本数～４～５本の薄植えを守りましょう～

厚植えは、過繁茂後の凋落、弱小茎や穂のばらつき病害虫の発生などにつながりますので、４本前後の薄植えを守りましょう。

②　植付深さ～深植えは、絶対にさけてください～

植え込みの深さは、地温の影響を直接受け、活着が遅れ、分げつの発生を阻害します。３cm程度の浅植えとし、深植えは、絶対にさけてください。

③　強勢茎の分げつ確保～活着後は浅水管理で水温を高めます～

本葉６～９葉期の分げつ（３～６号一次分げつ）をしっかりと確保します。強勢茎は、穂への有効率が高く、一穂精玄米が重く品質も高くなります。

７月の生育・栄養診断

①　中干しの実施～倒伏軽減法のポイントです～

倒伏に影響する下位節間の伸長する時期は、穂首分化期～幼穂形成期です。この時期に地上部の過繁茂等により、稈基部の受光量が減少した場合に、下位節間が伸長し倒伏が増加します。したがって、倒伏軽減法のポイントは、目標茎数を確保した上で、中干しや深水によって弱小茎の発生を抑制することが大事になります。

②　生育診断を踏まえた穂肥

○本年は、幼穂形成期～減数分裂期にかけての生育量、栄養診断値の低下が、一穂籾数の低下を招きました。生育栄養診断により、適切な時期に適切な量を施用することが、高品質安定生産を図るための、最も重要な技術です。

○また、本年は挫折型倒伏も多く発生しました。こうしたほ場は、幼穂形成期～減数分裂期の葉色が濃く推移したほ場です。本年のような分げつ期が高温で経過し、茎数を多く確保されたにもかかわらず、葉色の低下がみられなかったほ場は、基肥量の検討が必要です。

今月のあなたの運勢（2017年2月）

牡羊座（3・21～4・19）　好奇心を刺激されやすいので、興味を引かれることがあったら、チャレンジしてみて。趣味の集まりもラッキー